

天明六年版『宇治大納言物語』紹介・翻刻（一）

白石美鈴

〔安末から鎌倉中期の成立と目される説話集『世継物語』（別名小世継・宇治拾遺物語・宇治大納言物語等）の校本・諸本研究をはじめ、成立、作者、注釈、内容、享受などの基礎的研究は、今後の成果がたれる状況である。本文紹介については、世継物語の三系統諸本〔世継物系統本②宇治拾遺系統本③宇治大納言系統本〕のうち、①世継系統本文は、群書類従収集本『世継物語』や本紀要掲載「『世継物語注釈』」に活字本文の提示がされており、②宇治拾遺系統本文は、『会に翻刻紹介がある。しかし、③宇治大納言系統本文は未紹介である。ここで未紹介の③宇治大納言系統本文を持つ架蔵本の紹介と本文翻する次第である。本稿は、天明六年版『宇治大納言物語』上中下の内、上中巻の部分を紹介する。

〔③宇治大納言系統本③の特徴とその諸伝本を記す。宇治大納言系統伝本は、いづれも上・中・下三巻、全五十四話を所収。①世継系統本②宇治拾遺系統本収録の第八話・第十二話・第三十

三話・第三十八話・第四十一話・第五十五話の計六話を欠き、新たに『十訓抄』から四話増補したとされている。説話の配列においては、①世継系統本②宇治拾遺系統本は、説話の配列においても異なり、本文においても長文の脱落や増補がある。また、本系統の伝本に共通して、次の奥書を巻末に付帯している。

写本云

有宇治拾遺行世這箇物語未有鏤梓是
故乞假或家所秘之本使満直膳間多舛
差只追陶靖節之遺風不求甚解暫俟
日要考同異云爾

本系統諸伝本は、写本は、内閣文庫蔵坊城俊親奥書本、岡山大学図書館池田家文庫蔵土肥家本、京都大学文学部国文学研究室蔵伴信友本、慶応大学図書館蔵滋野井公麗自筆本、宮内庁書陵部蔵葉室家旧蔵本、静嘉堂松井文庫蔵緑竹軒自筆本、多和文庫蔵本の七本がある。写本のうち京都大学文学部国文学研究室蔵伴信友本は、無刊記版本を臨写し、静嘉堂

記載である。

翻刻にあたっては、次の諸項によった。

凡例

松井文庫蔵緑竹軒自筆本は、天明六年版以後の版本を書写したものである。版本は、(イ) 無刊記版本、(ロ) 天明六年版本〔無刊記版本を補刻・本文を校訂をして、再刊の事情を語る序文「兎道大納言物語序」・「高藤系図」を加えて刊行した。天明六年刊記勝村善兵衛版本、天明六年刊記書肆無記載版本、天明六年刊記河内屋八兵衛版本の三種がある〕、(ハ) 天明六年版の後刷版本〔文政七年刊記山城屋佐兵衛版本、天保四年刊記秋田屋市五郎版本、天保六年刊記秋田屋市五郎版本、天保十一年刊記書林仲間版本〕である。

架蔵本は、(ロ) 天明六年刊記大坂書房河内屋八兵衛版本である。

次に架蔵本版本『宇治大納言物語』の書誌を記す。

縦二二、二センチ、横一五、三センチの袋綴版本一冊から成り、無地納戸色表紙の左肩に白い題箋には「宇治大納言物語上中下」と外題がある。序文に「兎道物語」、上中下巻各本文冒頭に「宇治大納言物語上(中・下)とあり、本文匡廓は、縦一七、五センチ、横一三、六センチで、注刻に「宇治序 初」「宇治上 一(二〇十八終)」「宇治中 一(二〇十四終)」「宇治下 一(二〇十九終)」とある。丁数は、序文二丁、上巻本文一八丁・遊紙一枚、中巻本文一四丁・遊紙一丁、下巻本文一九丁。一面九行(序文・二一行(本文)、字高訳一六、八センチから一七、二センチである。下巻末に「天明六年丙午春求版校正／大坂書房河内屋八兵衛」と刊記がある。裏表見返しに「書林／江戸日本橋通壹丁目／須原屋茂兵衛／同日本橋通二丁目／山城屋佐兵衛／同芝明神前／岡田屋嘉八／同中橋廣小路／西宮弥兵衛／同浅草茅町二丁目／須原屋伊八／大坂南久宝町心齋橋南へ入／堺屋新兵衛／同順慶町心齋橋南へ入／堺屋定七」とある。歌は、一字下げ、注等は、二行わかし書きや三字下げでの

一、本文は、架蔵本版本『宇治大納言物語』を底本とした。当本は、天明六年 刊大坂書房河内屋八兵衛版本である。

一、翻刻に当っては、できるかぎり底本に忠実であることを旨とし、句読点、濁点、漢字、仮名づかい、疊字、ふりがな、ミセケチなどは底本のままとしたが、漢字、異体字、変体仮名は現行の文字に改めた。

見せ消ち・訂正・書き入れ部分は、該当箇所の左に*印を付す。

一、底本にはないが各説話の冒頭に私意により通し番号を付した。和歌は、二字下げとし、本文で二・三字下げた注記の類として本文とは区別されて表記されていると思われる部分は、三字下げて記した。また、底本にある二行「分かち書き」の部分は〔〕を付し、脇の傍書・注記の類は、() に入れて、底本にあるままに付した。

一、本文丁数は、丁の終わりに(一)を付し、上中下巻の別と丁数とその表裏を(上1オ)・(上1ウ)のように記した。

一、底本にはないが、各説話間に一行分の空白を設けた。

兎道大納言物語序

よろづのことは。すべてふすとあらはるゝと。ともにときにおうじてあらそうふべからざることわりあり。この宇治大納言物語てふふミハ。む

かし貞享四のとし。丁の卯に。はじめて世にひろめけるを。のちいづくにかうづもれけむ。今まさしうも、とせにみつるまで。かのたからのつるぎの。ほうじやうとかいへる所の地にひそミしにひとしかりしハ。げにおもひはかるべからざるゆゑなりけらし。しかのミならず。それがうち。四ひらばかりうせ」(序1オ)にたるを。からうじてふるきをたづねいで、補ひしついで。はじめをはりかうがへてよと。人のいふにまかせてよみ、るに。宇治拾遺とおなじつくりびと、見えぬれど。その風のしらべハ。いたくふりたらし。されば此ふミのふた、び世にあらはる、も。はたたからのつるぎのひかりをか、やかしけむにひとしう。時のめぐりかへるならむかし

天明六の年丙午春三月

洛 滄浪居主人書」(序1ウ)

宇治大納言物語上

1 いまはむかし。一条院御堂の御智にならせ給ひけれバ。もとの堀川右大臣殿女御。なげかせ給ふ事。いへばをろか也。上陽人の。春ゆき秋来れども年をしらねバと。いひたるやうに。あける、もし知らず。浅ましくなげかせ給ふて。やすく御とのごもる事なけれバ。残のともし火壁をそむける影も。心ほそくおぼさるゝに。御まへの梅心にくゝひらけにけるも。是を今までしらすりけるハ。我身世にふるとながめさせ給ふいつこより春ハ来にけんミし人もたえにし宿に梅ぞかほれる」(上1オ)

日比へて。院からうして。堀河殿におはしまして御覧すれハ、道見えぬぬまであれたり。あはれに御覧じていらせ給へバ。女御御木丁のうち。御硯のはこを枕にしてふさせ給へる。御まへにハ。女房二三人さふ

らひけれど。おはしませバ。ひき入にけり。めやすき人。あまたさふらひけれど。ミないではてゝ。えさらぬ人ばかりぞ残て侍ける。見奉らせ給へハ。白き御ぞ六七ばかりたてまつりて。御腰のほどに。御ふすま引かけておはします。御ぐしいとうるはしくめでたくて。御たけに二尺ばかりあまり給へり。たゞいま廿ばかりにや。されどわか」(上1ウ) くさかりに。きよげに見えさせ給ふ。なをふりがたきかたちなりかしや。御覧じて。やと。おどろかし奉らせ給へバ。なに心なく見あげさせ給へる。御かたはらにそひふさせ給ふて。よろづに。なきみ。わらひミ。なぐさ奉らせ給へど。それにつけても。御なミだのミながれ出くれば。よろづに申させ給へどかひなし。一宮いづこにかと申させ給へバ。おはしまして。うちはぢらひておはしませバ。此宮もはぢける物をとて。御泪をしのごはせ給も。いミじうあはれ也。女御の御そばの方に。たたう紙の」(上2オ)やうなるもの、ミゆるを。とりて御覧すれハ。思召ける事どもをか、せ給へり。

過にける年月何を思ひけん今しも物のなげかしき哉

うちとけて誰もまだぬ夢のよに人のつらさをミるぞかなしき千歳へん程をしらねバ来ぬ人をまつハなをこそさびしかりけれこひしさもつらさともにしらせつる人をばいかうしと思ハんとくとだに見えずもある哉冬の夜のかたく袖にむすふ氷のなか、せ給へるも。いミじくあはれ也。此むすぶ氷のとあるかたはらにか、せ給ふ。院の御せい

あふことのとゞこほりつる程ふれバとくれどとくるけしきたになし方に命おしからぬよしをのミ。えもいはずきこえ」(上2ウ)させ給ふに。宮のたちさハぎ見をくらせ給ふて。此たひのだに。まいていとひさしくおはしませねハ。女御今ハた、此歎を。我身のなからんおりそた

ゆべきとかなし。いつにてかとおぼしミたる。はかなくて秋にも成ぬれハ。風のをとをきかせ給にも

松風ハ色やみどりに吹つらん物思ふ人の身にぞしミける

右大臣殿。いミじうおぼし入たるを。此世はさる物にて。後の世のありさまも心うく。我身ゆへいたづらになさせ給ふ事と。いミじういとおしく心うくおぼさる。扱つるに。女御ハ病になりて「上3才」うせ給ひぬ。父のおとゝハのこされて。またなげきにうせ給ひにけり。御堂の御女御もの、けになりて。をだやかならずおハしけり。悪霊の左大臣殿とハ此御事也。〔堀河大臣顯光と申したり。関院大將朝光の兄にておハす〕

2今ハむかし。和泉式部がもとに。帥の宮かよハせ給ひける比。ひさしく音せさせ給ハざりけるに。其宮に侍しわらハの来りけるに。御文なし。かへりまいるに

またましとかばかりこそハあらましか思ひもかけぬけふの名くれもてまいらせけれバ。ひさしく成にけりとして。心ぐるしうて。やがておはしましたり。女も月「上3才」をながめて。はしにゐたりけり。せんざいの露きら／＼とをきたるに。人ハ草葉の露なれやとのたまはするさま。いふにめでたし。御扇に御文を入れて。御つかひのとて来にけれバとて給はす。扇を指出てとりつこよひハ帰りなん。あす物忌といふ也つなれバ。ながくもあやしかるべけれバとの給ハすれバ

心ミに雨もふらなんやどすぎて空行月のかげやとまると

きこえたれバ。あがきミやとしてしばしのほりて。こまやかにかたらひをきて。出させ給ふとて

あぢきなく雲の月にさそハれて影こそ出れ心やハゆく「上4才」
ありつる文をミれバ

我ゆへに月をながむと告つれば誠かと見に出て来にけり

何事につけてもをかしくおハしますに。あハ／＼しきものにおもはれまいらせたる。心うく覚ゆと。日記に書たり。初つかたは。かやうに心ざしもなきやうにみえけれど。後にハうへをもさり奉らせ給て。ひたるふるに。此式部を妻にせさせ給ひたりと見えたり。保昌にぐして。丹後へくだりたるに。明日狩せんとして。物とりつどひたる夜。小男鹿のいたく鳴けれバいであはれ。明日しなんずればいたくなくにこそと。心うがりけれバ。さ「上4才」おほさば。狩と、めんよからん歌をよミ給へといはれて

ことハりやいかてか鹿のなかさらんこよひはかりの命と思へハ
扱其日のかりハ。と、めてけり。保昌にわれられて侍りける比。貴布祢にまいりて。御手洗川に螢の飛たるをみて

物思へハ沢の螢も我身よりあくかれ出る玉かとそみる

時に男のこゑして式部が耳にきこえける

奥山にたきりておつる瀧つせの玉ちるはかり物な思ぞ

此歌。きふ称明神の御かへしなり。

3いまはむかし和泉式部がむすめ小式部内侍。う「上5才」せにけれハ。子とをミて式部

と、めおきて誰をあハれと思ふらんこハマさりけりこハマさるらん
また。書写のひしりの御許へ

くらきよりくらき道にそ入りぬへきはるかにてらせ山のはの月

4いまはむかし。みあれのせんしといふ人ハゆふにやさしく。かたちも
めでたかりけり。皇太后宮の女房也。中納言定頼文をこせ給ふ

昼ハセミ夜るハ螢に身をなして鳴くらしてハもえあかす哉
さやうにてかよひ給ふほどに心すこしかかりて。たえまがち也。

はる／＼と野中にみゆる忘水たえま／＼をなけく比かな」（上5ウ）

中納言みめよりはじめて。何事もすぐれてめでたくおはするを。心ある人ハ見しりて。なげかしき秋の夕くれ。きり／＼すいたく鳴けるを。ながきおもひハなど。詠め給ひけるを。わすれがたき事にいひたり。たえ給て後。賀茂にまいり給ふとき、いま一ども見んとおもひて。心にもあらぬ賀茂まいりして

よそにても見るに心ハなくさまでたちこそまされかもの川なミ
とて泪のミ。いとゞこほれまさりて。大かたうつし心もなく覚へける。

せミのなくをきゝて

恋しさを忍ひもあへぬ空蟬のうつし心もなく成にけり」（上6オ）
をのつからなけきやハなしとて。中納言にハをとれども。むげならぬ人に。したしき人。心あハせてぬすませてげり。其人いたくなけきて

身を捨て心もなきに成にしをいかとまれる思ひ成らん

世をかへて心みれとも山のはにつきせぬ物ハ恋にそ有ける

只中納言をのミこひ歎きて。いかにつミすかりけんとおもふに。たうとく目出度法師子を。山にもちて。をかれたりけるこそつミすこしかろミけんかしとおぼゆれ

御堂の中ひめ。三條院の御時后皇后宮と申たる女房也。本院の侍従みあれのせんしと申たる。侍従ハはるかむかしの。へいちうが世の人。此みあれのせんしハ。中比の人。されバむかしいまの人を。ひとつにぐして申たるなめり。

5 いまはむかし。紫式部上東門院に歌よミ。ゆふのものにて侍りしに斎

院より。さりぬべき物語やさふらふと。たづね申させ給ひけれバ。御双紙どもとり出させ給ふて。いづをかまいらすべきとさたせさせ給ふ程に。紫式部。ミなめなれてさふらふに。あたらしく作りてまいらせさせ給へと申しけれハ。さらばつくれとおほせられ」（上7オ）けれハ。源氏ハ作りて。まいらせたりける。いよ／＼心ばせすぐれて。めでたきものにて侍ル。去程に、伊勢大輔まいりぬ。それも歌よミのすじなれハ。殿いミじうもてなさせ給ふ。奈良より年に一度。八重桜を折てもてまいるを。紫式部とりつぎまいらせ。歌などよミけるに。式部今年ハ大輔にゆづりさふらハんとて。ゆづりけれハ。とりつぎてまいらするに。殿をそし／＼と。おほせらるゝ。御こゑにつきて、

いにしへのならの都の八重さくらけふ九重に匂ひぬる哉

とりつぎたるほど。殿のおほせられつるほともな」（上7ウ）かりつるに。いつのまに思ひつゝ、けん人とおもふ。殿もおほしめしたる。目出度てさふらふほとに。父の大納言といふ人の子の越前守とて。いミしくやさしき人の妻に成にけり。あひはじめたりける比。石山にこもりて。をとせざりけれバ。つかハしける。

見るめこそあふミの海にかたからめ吹きだにかよへしかのうら風

とよみてやりたりけるより。いとゞ歌のおほえらまさりにけり。殊。子孫さかへて。六條大式。堀川大式など。申ける人々ハ。此い勢大輔が孫なりけり。一ノ宮と申けるおりにまいりて。ミ」（上8オ）まいらせけるに。鏡を見よとてたびたりけれハ。給はりて

君ミれバちりもくもらで万代のよハひをのミもます鏡哉
御返し大夫殿。宮のおほちにおハします、

くもりなき鏡の光ます／＼もてらさん影にかはらざらめや

6 いまはむかし大神宮。たくせんして。祐親^{すけちか}をめして。大やけの御事などおほせられるつゝでに。御みきめして。かハラけ給ハすとて。よませ給へる

さかづきのさやけき影のみえぬればちりのおそりハあらじとをしれ御ぞ。たてまつりける。さいしゆ。すけちか」(上8ウ)

祖父^{フホ}父^ヂ孫^{ムス}祐親^{ユケチカ}か三代迄にいた、きまつるすへら御神か、るめづらしくいミしきことのありけれハ。伊勢大輔が御祝事也

7 いまはむかし。亭子院^{ていしん}。御ぐし。おろして所^{ところ}の山住^{さんぢ}し給て。おこない給けり。備前のぜう橋のよしとしといひける人ハ。殿上人^{てんじやう}にてありけるが。御ともに。かしらおろして。をくれ奉らず侍ひける。内の御使^{みづか}。尋^{たね}つ、奉らせ給へど。たがひつ、ありかせ給ふ。和泉の国。ひねとふ所に。おハしますとて。ひねといふ心よめよ。仰られけれバ。此義^{このよし}敏大徳^{とんだいとく}」(上9オ)

古郷のたびねの夢に見えつるハ思ひやすらん又と、ハねハミナ人なきて。よまず成にけるとぞ

8 いまはむかし土御門中納言。御使にて大内山に御門おハしましけるに。まいり給へる。物心ばそげにて。おはします。いとあはれ也^{たかき}。高所なれは。雲^{くも}ハしもよりたちのぼるやうに見えけれバ

白雲の九重にたつ嶺なれハ大内山といふにぞ有ける

9 いまはむかしかつらのみに。式部卿の宮。通^{かよ}ひ給ひける時。其女君に候けるわらハ。此男宮を。いと目出度と思ひかたてまつりけるを。知^{しり}給ハざりける。螢^{ほたる}の飛びありくを。かれとらへてこと。此わら」(上

9ウ)ハにの給ハせけれバ。とらへてかぎミの袖に螢をつつミて御覽ぜさせ。きこえける。

つゝめともかくれぬ物ハ夏虫の身よりあまれる思ひ也けり

10 いまはむかし。亭子院に。宮す所達あまた。御さうして住給ふに。年比^{とし}ありて。おもしろく。作らせ給て。京極の宮す所のかたをのミして。ぐしてわたらせ給ひにけり。春のことなりけり。こと宮^{みや}す所たち。いとおもひの外に。口おしくさう^くしく覺しけり。殿上人をよび給て。藤のはなのいとおもしろきを。是^{こゝ}か盛^{さか}をだに御覽ぜよなど。いひてありくに。文を」(上10オ)なんむすび付たりるを。あけてミれバ

世中のあさきせにしも成行けハきのふの藤の花とこそミれとありけれバ。人々みて哀がりめでけれども。たが御しわざといふ事もしらざりけり。是ハ。御門出家して。いミしうおこなハせ給ひければ。てんぐのつきまいらせて。京極の宮す所におとしまいらせたりけるとぞ

11 いまはむかし。近江介平のなりきか。むすめをいたくかしづきけるが。おやなくなりて。とかくはふれて。人の国に。はかなき所にすミけるが。おやあはれとおもひて。かねもりが。いひやりける」(上10ウ)

遠近の人めまれなる山里に家あせんとハおもひきや君

といひやりたりけれバ。返しもせでよ、となきける。女もいとりやうある人になん有ける

12 いまはむかし。よしちかの中納言とハ。花山院の御おちにおはします。御門出家せさせ給ふて。いひ室^{むろ}といふ所にそおハします。坊^{ぼう}のまへの。さくら。いとおもしろかりけれハ。ひとりごち給ひける

みし人の忘れのミ行山里に心なかくも来る春哉
ひさしくありてぞもり聞えたりける

13 いまはむかし。円融院かくれおはしまして。墨（上11オ）染桜おもしろかりける。折て人のがりやるとて。実方の中将、

墨染の衣うき世の花さかり折忘ても折てける哉

14 いまはむかし。世の中哀にはかなき事を、摂津守為頼といひける人

世中にあらましかバと思ふ人なきが多くも成にける哉

これをき、小大君

あるハなくなきハ数そふ世中にあはれハいづれの日まで歎かん

15 いまはむかし。一条院位につかせ給ふ年の。賀茂のりんじの祭の帰りあそび。御まへにてあるに。あるへき殿上人上達部。残なくさぶらひ給。（上11ウ）源のかねずミ。舞人なるに。かハラけとりたるに。摂政殿御覧じて。いはひの心に。わか一ツつかうまつれと仰らる、まゝに。よひのまにとうちあげたれハ。殿いミしう。けうぜさせ給ふて。をそしと。こと殿バらも申給ふに。君をしはのりをきつればと申たり。殿いミしうめでさせ給ひて。をそしと仰らるれバ。まだ夜ふかくもおぼゆるかなと申しけれバ。ほめさせ給て。御ぞぬぎてかづけさせせり

16 いまはむかし。村上の先帝の御時。雪のいとたかう降たりけるを。やうきにもらせ給て。（上12オ）梅の花をかざらせ給ふて。月のいとあかきには歌よめ。いかゝハいふべきと。兵衛の藏人に給はせ給ひけれバ。雪の花と奏したりけれバ。いみしうめでさせ給けり。歌などよむハ

世のつね也。折にあひたることいひがたけれとぞおほせられける。同人殿上人のさふらはざりけるほど。すびつに煙たちけれバ。何ことぞ。見てことおほせられけれハ

わたつ海の奥にごがる、物ミレバ蟹のつりして帰也けり
此兵衛のぜうたそとよ。名をしらず

17 いまはむかし。時の殿のは、上。小門寺といふ寺（上12ウ）におはしけるをきゝて。またの日。をの殿に人いとおほくあつまりて。あそひしに侍りけり

薪こることハきのふにつきにしをきふをの、ゑをこゝにくたさん
とよみ給ひたるこそいとめでたけれ

18 いまはむかしすゑつなの少将といふ人ありたる。大井に住けるころ。御門の仰られける。花おもしろく成なバ。御覧ぜんとたまひけれど。おほしわすれて。おはしまさゝりけれバ。少将

散りぬれハくやしき物を大井川岸の山吹今さかり也

此すゑつなハ。病つきて少をこたりて。内にまいりたりけり。公忠弁かもりのすけにて。藏人な（上13オ）りける比の事也。ミたち心ち。またよくもおこたり侍らねとも。心もとなくてまいり侍つる。後ハしらねともかくまで侍る事。あさてばかり又まいり侍らん。よきに申給へとてまかでぬ。三日ばかりありて。少将のもとより

くやしくぞ後にあはんと契ける今日を限といはまし物を
さてその日うせにけり。あはれなる事のさま也

19 いまはむかし藤原のまさちかハ。世のすきものにて侍りし。父の越後

守為時に。ともなひて。彼国へ下りけるほどにおもくわづらひけるが

都にも恋しき人のあまたあれバ猶此度はいかんとぞ思ふ」(上13ウ)

とよみたりけれども。いと、かぎりへのミ見えけれハ。父のさたにて。

或山寺より。とくある知識をよびたりけるに。中有なかゆうの旅たびのありさま。心
ぼそきやうなどかたりて。是にやすらハで。すぐに浄土へまいる給へな
どいひ聞せけり。まさちか。中有とはいかなる所をやと申せは。夕暮の
空に。広ひろき野に行出たる様にて。しれる人もなくて。たゞひとり心ほそ
く。まよひありく也と答るをきゝて。其野にはあらしにたぐふ紅葉。風
になひく尾花がもとに。松むし鈴むし鳴くにや。さだにもあらバ。何か
ハ苦しからんといへる。是」(上14オ)をきゝて。あひなく心づきなく覺
へけれバ。僧にげはしりにけり。此歌のおはりの。ふ文字もじをバ。ゑか、
ざりけるとかや。さながら都へもて帰り。おやども。いかにあはれにか
なしかりけん

20いまはむかし一条院の御時。まさひろとて。いみしく人にわらはる、
藏人ありけり。おやなどもありける。物の上手にて。下かさね上のきぬ
など。人よりハきよげにてありける。これをこと人にかしける。里へ宿
直物とりにやるおのこ。二人まかれといへバ。ひとりしてとりてまかり
なんといへバ。あやしのおのこや。ひとり」(上14ウ)てふたりか物もつ
べきぞ。ひとますがめに二ますはいるやといふ。なにはしらねども。い
ミしう人わらひけり。人の使のうせ。とく／＼といへバ。などかうハま
どふか。まことにまめやくへたか。此殿上のすミにてハ。物のぬすミか
くしたるぞ。飯酒ならばこそ。人ほしうせめといへバ。また笑事かぎり
なし

21いまはむかしうせたる人。とかくする烟を御覧じて。大齋院

立のぼる煙につけておもふ哉いつまた我を人のかくミン

22いまはむかし一条院の御時。后宮に清少納」(上14オ)言とて。ゆふに
いミしきもの侍ひけり。殿上より梅の花ちりたる枝を。是をいかゞと。
いひたるに。たゞはやうおちにけりといらへたりけれハ。其事をずんじ
て。黒戸くろどに＊殿上人おほくおほくゐたりけるを。御門もきこしめして。歌
などよミたらんにまさりたる。よくいらへたりと仰せられけり

23いまはむかし二月晦日がたに。風うち吹雪うちふる程に公任宰相中将
ときこえけるなり。清少納言がもとへ。ふところがミに書て

すこし春あるこ、ちこそすれ

とありけり。実古歌けいこのけしきに。いとよくあ」(上15ウ)ひたるをいか、
つくべからんとおもひわづらふ

空さむミ花にまかひてちる雪に

と。めでたくかきたり。いミじうほめ給けり。としかたの宰相。ないし
になさばやなど。のたまひけりとぞ

24いまはむかし四条大納言。前裁つくろハせ給ひけるに。心もなきもの
なでしこを。引すてたるを見給ふて

すき物を花のあたりによせさらバ此常夏にねたえましやハ

25いまはむかし。五月のなが雨の比。うへのミつばねのみすのまへに。
齋院頭ノ中将よりぬ給」(上16オ)へりける。かのまことにめてたく香ば
しう。その物ともおほえず。雨にしめりたる程のいミしうおかしかりけ

り。五六日まで。簾にうつりたりければ。わかき女房達。シミかへり。めてあはれたりけり。一条院の御時。皇后の御方にそ

26 いまはむかし。清少納言。清水にこもりたりけるに。宮より御つかひさして給ハせける

山ふかき入あひの鐘の声ごとに恋ぞ日比の数は知らん

又九月九日。すこし山ぎハ近く成程に。つねまさの少将いとたかやかによびたてゝ。これ右の大いとの、御文とてさし入たり。かうぞめの紙に」(上16ウ)

みな人の心うつろふ長月の菊に我さへすぎぬべき哉

をそし／＼とせめにつかはす。かきつくべき方にぞなかりしかとぞ。右のおほいとハ。あはた殿の事なり

27 いまはむかし源中将のふたかといふ人一条院御時。こき殿女御の御方に。うちふしの御こといひかうなぎのむすめの侍けるを。いミしうおもハれけり。中宮の御かたにまいりて女。房達にあひて。物語などして。

時／＼御とのゐなどつかうまつりけれども。女房達もてなさせ給ハねバ。いと宮仕をろかにさふらふ。宿直所」(上17オ)をだに給ハりたらハ。まめに侍などいひる給へりけれバ。人／＼げになどいひたるに。清少納言。まことに人ハうちふし休所のあるこそよけれど。さるあたりにハ。しげくまいり給ふなる物をと。さしいらへしたりけれハ。すべて物きこえし方人とたのミきこえたれバなど。まめやかにゑんじ給。いかなる事をかハ申するほどおもはて給ふやうにぞあらめ。さて花やわらふこそその、ちたえてやミ給にけりとぞ

28 いまはむかし。越前守為時とて。ざえある世にやさしかりける人ハ。紫式部か親也。此為時が」(上17ウ)源氏ハ作たる也。こまかなる事共をむすめにはかゝせたりけるとぞ。前斎院の宮。この事きこしめして。むすめをめし出たりける。初てまいりける夜。内の御前閑白殿など。いかなる事をかせさせ給ふべきなど申させ給て。殿の申させ給ける。たゞ今夜見えさせ給ふべきぞと申させ給ふれば。其夜さしむかひみえさせ給けり。世にめづらしくめでたき事といひの、しりけり。式部が有様。かゝるめでたき事ども作りいだしたる人ともおぼえず。裳から衣きたるすがた。やうたいもてなしなど。」(上18オ)いとあやしう心もとなげにてぞ侍ける。此源氏作たる事。さま／＼に申伝たり。まいりて後に作たりとも申。いつれかまことならん

29 いまはむかし。菩提院といふ所に。法華八講しけるに。清少納言。ま

いとめてもかゝる蓮の露ををきてうき世にまたは帰物かハ

宇治大納言物語中

30 いまはむかし。一条院の御時。皇后宮と申たるは。師の内の大との、御いもうと。あけくれいりるさせ給て。物をのミおもひてうせさせ給ひにき。うせ給て後。木丁のひもに結び付られたりける歌。内にもきこしめせとおぼしけるにや

夜もすから契りしことを忘れずハこひん泪の色そゆかしき

31 いまはむかし。四条大納言出家し給ひぬときかせ給て。御堂より御そ

古へはおもひかけきや取かへしかくきん物とのりの衣を」(中1オ)
御かへり長谷より

何事も契りかハラできかへきを君が衣にたちをくれける
定頼公さとよりきこえ給けり

古郷の板間の風に夢覺て谷の嵐を思ひとそやれ
三井寺より権中将の君

まだなれぬ御山がくれに住そむる谷の嵐ハいかに吹くらん
御返し

谷風になれずといかに思ふらし心ハはやく住にし物を
まことや弁の君の御返り

山里の谷の嵐の寒さにハ木の本をこそ思ひやりつれ

32 いまはむかし衛門尉なりけるものゝ、ゑせなる」(中1ウ) おやをもち
て。人のミるおもてぶせなりとて。伊予の国よりのほりけるが。海にお
やとおとし入てげるを。人心うがりてあさましがりけり。七月十五日
に。ばんを奉るとていそくをみ給ふて。道命あざり

わたづ海に親をし入て此ぬしのほんするみるぞ哀也ける

33 いまはむかし。御だうつくらせ給けるおりに。ゆふなるおきな。あ
やしきかほの池にうつるをみて

くもりなく鏡とミゆる池の面にうつれる影のはづかしき哉

また頭のしろき法師」(中2オ)

かくばかりさやけてれる夏の日に我いたゞきの雪ぞ消せぬ
などいふものゝ、おほゆるにやとあはれ也

34 いまはむかし。たゝのぶの大納言。人の声をこそよくきゝしり給ふた
りけれ同所の女房達のけハひ。これもえきゝわかぬに。おとこは人の手
とこゑとハ。さらにみきゝわくることかたうこそあれ。殿上人にて中将
と申けるに。かゝる君ぞとて。いミしうみそかに人をかへつゝ。中宮の
女房達きかせ奉りけるに。かしこくいひあて給けり。又大藏卿まきミつ
といひける人ハ。耳とき人にて。まことにかのまつげの」(中2ウ) おち
んもきゝつけつべうそありける。宮の御かたにて。時の大いどのゝ新中
納言。ゆきのこといつかと。女房達にさゝやけバ。あの君のたち給ひな
んかと。耳にさしあてゝいふを。えきゝつけでなにか／＼とおぼめ
く。まさミつ遠くゐて。にくし。さのたまハば。けふハたゝじとの給ひ
けんとそ。浅ましうも。おかしうもおぼされけれ

35 いまはむかし。後一条院生れさせ給ふ時。上東門院。事外に悩ませ給
ひけれバ。御堂の入道殿。さはがせ給ひて。御前より御障子をあけ」(中
2オ) て。はしり出させ給ふて。こハいかゞすべき。御誦経などかさね
てすべきと仰せられける。御詞いまだおはらさるに。勘解野相公有国
卿。いまだわかかりける時申ていはく。御産ハ既になり候たる也。かさ
ねて誦経におよぶべからずと申程に。女房はしりまいりて。御産すでに
なりぬと申けり。事はて、後有国をめして。いかにして。御産なりぬと
ハ知りけるぞとハせ給ふに。障子ハ子をさふと書て候に。ひろくあき
て候なればバ。御産なりぬとぞんじて申つると也」(中2ウ)

36 いまはむかし相坂のあなたに。関寺といふ所に。牛仏あらはれ給ふ
て。万の人まいりみたてまつりけり。大なる堂をたてゝ。弥勒を作りす
へ奉りける。それえもいはぬ大木ども。たゞ此牛一ッして。はこぶわざ

をなんしける。つながねどいきたることもせず。さやかに見めもおかしげにて。れいの牛の心ざまにもにざりけり。入道殿をはじめまいらせ。世の中におハしある人の。まいらぬハなかりけり。御門東宮ぞおハしまさざりける。此うし。なやましげにおはしけれバ。うせ給べきかとて。いよ／＼まいり（中4才）こんひじりハ。御ゑいぞうをか、せんといそぎけり。西の京に。いとたうとくおこなふひじりの夢にみえける。せう仏だうに。ねはんのうく也。（本のマ）ちさうとくけちゑんせよとぞみえたりけれバ。いとゞ人まいりける。歌よむ人もありけり和泉式部聞しより色ぞ心をかけながら又こそこえねあふ坂の関

37 いまはむかし。円融院うせさせ給ひて。紫野、方にて御そう／＼ありけり。一とせ子の日の折など思ひ出給ふて。閑院の大將

紫の雲のかけてもおもひきや春の霞になしてミんとハゆきなりの中將をくれじと常の御幸ハ急しを煙にそはぬたびぞ悲しき

38 いまはむかし。御堂出家せさせ給ひて。衣かへのものとり。上東門院へまいらせ給ふとて

から衣花の袂にたちかへよ我こそ春の色ハ立つれ御返し

から衣たちかわりぬる世の中ハいかでか花の色をきるべきこれをきゝて。いづミ式部かまいらせたる

ぬぎかへん事そ悲しき春の色を君がたちける衣と思へバ

39 いまはむかし。（宰相有因）宇治殿の御夢に。大かうじを三つ後覽じたりけるを。

夢ときにとかせ給じたりけれバ。あめ牛三ついできなんと申たり（中5才）けるに。実^{*}に人まいらせたりけれバ。御前につなきて興じ御覽じけるに。其比りうさの三位とて。いミしき人ありけり。まいりて此牛どもをみて。なでう牛にかさふらふと申。かう／＼夢に見えてある也と。仰られけれバ。目出度御夢をわろくあわせたり。此御夢あハせんとて。よき目をとりて。目がくしのまに。うるハしう装束して。此御夢をかたらせ給ひてあハす。三代の御門の関白をせさせ給ハんとあハせ申たりける。実に三代の御うしろミせさせ給ふて。四代といふ後三条院の御時う（中5ウ）ぢにこもらせ給ひにけり。夢はあハせから也

40 いまはむかし。一条院の御時。雪いとおもしろく降たりける朝。はし近く出させ給ひて。雪御覽じけるに。香爐峯^{かうろうぼう}のありさま。いかならんと仰られけれバ清少納言御前にありしが。申ことなくて。御簾^{みす}をしはりたりけり。世の末まで。ゆふなるためしにいひつたへられける。彼ノ香

爐峯の事の事ハ。楽天老の後。此山に一つの草堂をしめて住ける時の詩二云、

イアイジノカネハツハタテ、マクラキ
遺愛寺鐘 欽 枕聴 カウロ ホウノユキハカケテスダレサミル
香爐峯雪 撥 簾看

とあるを。御門仰出されるによりて。御簾（中6才）をバあげける也。此清少納言ハ。天歴の御時。梨壺の五人の歌仙也し。清原元輔女^{むすめ}にて。大和ことばも家の風吹伝へたりけるうへ。心ざま。わりなくゆふにて。折につけたる。振舞。いミじき事おほかりけり。

41 いまはむかし。西の御まへ御堂にて。人／＼しバし出給へ。心のどかに念仏せんとたまハせれバ。殿バラも。里へわたらせ給ひぬ。念仏せされたまふ。其程らいはんに僧一人侍て。経よみ奉る。かゝるほどに。

とりいでて引給ひけるに。かうしのあげたる上に。物のひかるようにするを。やをらミレバ。たけ一尺ばかりなる天人どものきて。二三人ばかり聞給ひけり。

47 いまはむかし。はくがの三位といひける人ハ。えもいはぬびわの上手也。まだわらハにておさなくおはしけるに。木幡^{こはた}とかやに。目つぶれたる法師の。世にあやしげなるに。琵琶^{びわ}ハならひ給ひけり。ひてうのえもいはぬ三つありけり。それをハかくして。えしらずとてをしへざりけれハ。心うくおぼして。うらミて都へ（中9オ）かへりて。夜な／＼みそかにおハしつゝ。せんざいの中にゐたり。かくしつゝ、百夜に成にけり。万此しらずとて。かくしたるてをや引とおほしけるに。大方ひかざりけり。すてに百夜に成あかつきに。心をすまして此法師おき出て。九月ばかりの月のいミしうあかきに。打ながめつゝ。此かくしつる手共を三つながらこそ。引はてさせて。前裁の中より出たり。法師いと浅ましと思ふ。此月比かうしつゝ。百夜に成ぬるよしをいふに。心ざしのふかきをあはれがりて。おしむ手みな」（中10オ）をしへつゝ。さて後此法師いづちともなくきえうせにけり。天人へんじて。かゝるあやしき物と成て有けるとぞ。扱此三位ハ。びわ引給けれバ。空にえもいはず樂^{がく}をしあはせつゝ。たいこうちなどするをとしけりとぞ申侍たる。

48 いまはむかし。さい^在ご中^五将二条后宮た、人にておハしける。よばひ奉りける時。ひしきものを奉りてかくな

おもひあらハ葎の宿にねもしなんひしき物にハ誰をしつゝ、もかへしハわすれにけり。扱後さきさきにて」（中10ウ）大原野にまうで給けり。上達部殿上人つかうまつりけり。業^{なり}平^{ひら}宰相^{さいしやう}中將。なまくらき折。

御車のあたりにたてりけり。人／＼ろく給て後なりけり。御車のしりにより奉れる。御ぞをかげ奉へり給へり。たまはるまゝ、に中將大原やおしほの山も今日こそハ神代のこともおもひ出らめむかしおもひ出ておかしと覚けり。又内にて。忘草を是ハなにとかいふとて給へりけり

忘草おふる野べとハミゆらめとこハ忍ふ也涙もたのまん

49 いまはむかし。柏原の御門の御時に。平の宮作らせ給ける間。ながをかの官より時／＼行幸」（中11オ）して。あたらしくつくらるゝ都を御らんずるに。とばかりおハしますに。らいせい門のへんにて。御輿^{ごこ}を止めて。たくミをめして仰られけるやう。作られけるやう。いとよく門ハたてたり。但たけなん今一尺きるべき。風はやき所に。ひとつやにて。たてたれバ。風のためにあやうき也。風ハたけいますこし。まさりおとるにしたがひて。ふせがるゝ事なれバ。所の地のていにしたがひて。たけの程ハたつるを。此比のたくミハそれをえしらで。屋をたつれバ、此門いま一尺きれ。さらバよかりなんと。めして仰せられて。うちに入せ」（中11ウ）給て。長岡の宮にかへらせ給ひぬ。扱作りはてゝ。都うつり。ちかく成て。行幸して。御らんず。はじめのごとく。らいせい門のまへに御輿^{ごこ}をとめて御覧するに。かハらぶきに。しらつち。みなぬりはてたり。こと／＼くに。ミなしはてゝ。金物ばかりうたさりける。たくミめして。おほせらるゝやう。我ハはじめあしくみて。一尺きれと仰てけり。一尺五寸ぞきらすべかりける。いま五寸きるべし、猶たかくミゆると仰られけれバ。たくミ俄にふしまろび。をちかんじて。さまあしく。ふるうやうにすれバ。あやしとおほし」（中12オ）めして。いか成事ぞと問ハせ給へハ。たくミの申やう。此門のたけハ。本の門のやうにたてあ

はせさふらふを。一尺切れと仰られしが。仰のまゝに。きりてハ。むげにひきくまかり成なん。とをく見あぐるに。たかやかにてさふらふこそ。きら／＼しくさふらへ。かゝるはなれやの。ひらに見えバ。みぐるしくさふらひぬべしとおもひさふらひて。五寸を切さふらふなり。それに今五寸と仰さふらへハ。はし(め)。御覽しそこなひたるにハさふらはず。五寸かたミてきりさふらはずと申。御門かしこくみてげり。」(中12ウ)こぼちきらバ。宮うつりの日近く成りてえあハせじ。さふらハせてあるばかり。たゞし風にやともすれバ。吹たうされんと仰事ありけれバ。たくミの申やう。いミしくつよく作りてさふらふもの也。たけ五寸きりさふらいぬれバ。更にあやうき事さふらハじとなん申けり。扱ミやこうつりの、ち。末の世に至るまで三度ばかり吹たをされたりけれバ。御門御覽じたる事かなひにたり。いミじうおハしましけり。物の上手となん申侍たる。さて／＼円融院の御時。大風にまた(中13オ)吹たうされにけり。其後ハつくりたる事なし

50 いまはむかし。一条院の御。或殿上人。水無月^{みなづき}廿日あまり。いとくらきに。后宮にまいりて。めんたうにたゞずみけるに。うへより人の音のあまたして来りけれハ。さりげなくひきかくれて。のぞきけるに。つばのやり水に。螢のおほくすだくを見て。さきなる女房ゆゑしきほたるかな。集^{あつめ}たるやうにこそミゆれとてすぐるに次なる人ゆふなるこゑにて。螢火^{ケルハミクトウ}乱飛と口ずさ(中13ウ)ミけり。また次なる。夕殿に螢飛でと。うちながむ。しりなる人。かくれぬ物ハ夏虫のと。はなやかにひとりごちたりけり。とり／＼やさしく。おもしろくて。此男なにといふ一ふしもなからんがほいなくて。ねづなきをし出たりけれバ。さきなる女房。物をそろしや。螢にも声のありけるよとて。つや／＼さはぎたるけしき

もなく。うちしめりたる空おほめきの程。あまりに色ふかくなしう覚けるに。今ひとり。なく虫よりもこそおもひしにと。取なしたりける。是また思(中14オ)ひ入たるほど。堪がたく。おくゆかしかりけり。まことに。とり／＼にやさしく覚ける。此心ハ

音もせてミさほにもゆる螢こそ鳴虫よりもあハれ也けれ

51 いまはむかし。いせのミやす所。七条の後の宮にさふらひ給ひける比。びわの大納言の忍びてかよひ給けり。女いミしう忍ふとすれど。みな人知ぬ。さるほどにわすれ給ひぬれハ

人しれずやミなましかバ佗びつゝ、もなきなぞとだにいましものをとよミてやりたりけれバ。あはれとや覚えけん。かへりて。いミじう覚して住給ひけり。ほに出て人をとよみたるも。このおとゝにおはす(中14ウ)

【注】

- (1) 拙稿『世継物語』注釈(二)(八)「(日本女子大学起紀要文学部」第47号平成10年3月／第57号平成20年3月)
- (2) 拙稿「宮内庁書陵部蔵藤波本『宇治拾遺物語』翻刻(二)(産)」(『会誌』第7号平成元年3月／第9号平成3年3月)
- (3) 小内一明「小世継物語伝本考(一)」宇治大納言系統の成立(『大東文化大学紀要・文学部』昭和44年2月)・高木浩明「『世継物語』の伝本について(二)」宇治大納言物語系統諸本解題(『二松学舎大学人文論叢』第50号平成5年3月)に宇治大納言物語系統諸伝本について、詳細な伝本紹介・その系譜についてのご考察がある。